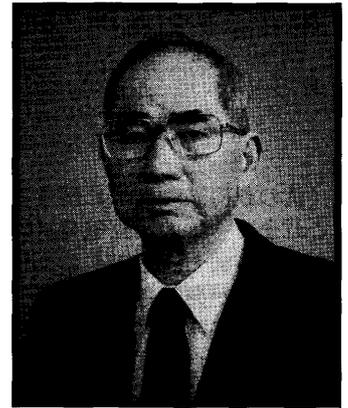


宋 永焜先生のご逝去を悼む



元関東学院大学工学部土木工学科教授であり、かつ武漢工業大学客員教授であった宋 永焜先生は、去る平成14年2月6日、横浜市にあるご自宅にて肝臓病のため急逝されました。享年72歳。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご遺族の皆様に対し心から弔意を申し上げます。

宋先生は1929年、台湾高雄に生まれ、1964年国立台湾大学工学院土木工程系を卒業し、1966年留学生として来日され、京都大学大学院工学研究科修士課程（土質力学専攻）に入学されました。1972年3月に学位申請論文「安定処理土の構造と工学的性質の相関性に関する微視的研究」によって京都大学より工学博士の学位を授与されております。その後、台湾国立成功大学工学院客員教授として台湾へ帰国されましたが、4年後に東海大学海洋学部助教授として再来日され、1981年より関東学院大学工学部教授に就任されました。関東学院大学の教授として教育・研究に従事されたのみではなく、精力的な学術交流の結果、中国 西安公路交通大学名誉教授、中国 重慶交通学院名誉教授、中国 長沙交通学院名誉教授、中国 武漢交通科学技術大学客員教授等を歴任されました。中国での講演回数は20数回、講演大学や政府機関は12カ所に及びました。2000年3月に関東学院大学工学部を退職されてからは、武漢工業大学客員教授として引き続き教育・研究にご尽力をされておりました。また、1976年より日本材料学会地盤改良部門委員会の委員として社会活動にも積極的に参加されておりました。

研究活動としては数多くの論文を発表なさり、その研究成果を我が国の土木技術向上に貢献されてこられました。論文のほとんどを単独で執筆され、自らも認めるほどの多忙な毎日を過ごされておりました。ご退職される寸前まで、日夜のご研究は留まるところを知らずという勢いでありました。土木工学科には二部もあるため、宋先生の生活は比較的夜型であり、日付が変わる真夜中近くまで教授室の灯りが付いておりました。消灯されると同時に颯爽と自転車に飛び乗ってご帰宅される姿を鮮明に記憶しております。宋先生の自転車のスピードは学内で噂になるほど、ちょっとしたものでした。

宋研究室の研究テーマは、関東ロームのアロフェン含有量が地盤工学的性質に及ぼす影響の解明でした。アロフェンとは関東ロームに含まれる微少な球状粘土鉱物であり、定量的に測定できる数少ない粘土鉱物の一つであります。宋先生は、この粘土鉱物の含有量と工学的定数との相関性に着目されておりました。幸いにして関東学院大学のある横浜市という土地は、無尽蔵に関東ロームを提供してくれる大地の真ただ中に位置しており、研究材料には事欠かない状況でありました。宋先生は10数年間にわたって自ら試料採取に臨み、150あまりの試料を採取して系統的な研究成果を発表されてきました。この研究活動は、地盤工学会特殊土解説執筆委員会委員として、書籍「土質試験の方法と解説」の関東ロームを主筆されるに至り、関東学院のアロフェン研究を世に知らしめる結果となっております。

宋先生の専門は地盤工学ではあるものの、ご講義は交通工学と土木施工を担当されておりました。そのため、授業のための勉強を一からすることになり、地盤工学を教える機会には恵まれませんでしたが、地盤工学への視野を広げることができたと、逆に感謝の念を抱いておられました。このご経験は、後年の地盤工学以外の分野での多岐にわたるご活躍の礎となり、神奈川県道路環境整備にかかわる委員会などの委員長を歴任される結果となりました。宋先生はその巡り合わせを、むしろ感謝し、幸せであったと話されていました。宋先生は、ご自分の置かれた立場や逆境に対し、すべてを前向きに考えて常に感謝の念を抱く人格者でありました。

宋先生は京都大学時代のご自分を振り返って、「大学院は独習の方法を会得した者の独壇場である」、「私は水を得た魚のように、こよなくこの生活を愛し、楽しんだ。むしろ学位はどうでもよかった」と語られておりましたが、その研究に対する姿勢は70歳でご退職されるまで継続されていたように思われます。宋先生の研究に対する一途な姿勢は、人間的な豊かさがもたらした結果であり、10数年にわたって宋研究室を巣立っていった多くのメンバーに影響を与え続けたと思われまます。ことに私は多大な影響を受けた一人であり、感謝の念に堪えません。

宋先生は関東学院大学を退職するにあたり、最終講義は行われませんでした。「自分のために多くの人に集まっていただけは忍びない」とのご配慮の結果であり、宋先生の徹底した謙虚ぶりと、献身的ともいえる一直線な人格を再認識させられた次第です。最終講義の代わりとして、関東学院の学内報に自叙伝にあたる「我が回想」記をご執筆されました。最後に、「我が回想」からの引用をもって宋 永焜先生のお人柄を偲び、尽きることのない尊敬の念に代えさせていただきます。

—「くり返し言う、私は幸であったと」—

（遠藤和人 京都大学大学院工学研究科博士後期課程
元関東学院大学大学院宋研究室）